

---

## 故 三浦謹一郎先生を悼んで

埼玉医科大学ゲノム医学研究センター名誉所長／東京大学名誉教授

村松 正實



昨年9月、三浦謹一郎先生が急にお亡くなりになった。私は、10日も経った後の、日本癌学会で初めてその知らせを受けて、顎然としたのだった。昨年中は学会や研究会で2～3回お会いして、お元気の御様子であったので、何か、急性の病で亡くなられたものと思われ、同年輩（実は私より半年年長）の貴重な友を失った驚きと、悲しみが、じわじわと押し寄せて来た。

三浦さん（親しみを込めて、敢えてこう呼ばせて戴く。）は本当に私と同世代の、日本の戦後の生命科学の発展を自ら経験し、支えて来られた、戦友と云ってよいお方であった。

彼は理学部、私は医学部出身で、考え方に多少の差があったとしても、科学的思考という点では勿論一致しており、私が臨床などを経験している間に、彼は理論的にも実験においても、常に一歩先んじており、いろいろと教えられる事が多かった。

三浦さんのお仕事については、若干、領域の近い西村暹氏（何と3人共同の年であったのだ！）が詳しく書かれる由、私は極く大雑把に、歴史的に著名な2つのお仕事を挙げるに止めたい。その一つは転移RNAの構造と機能に関するもので、遺伝情報の翻訳に関して大きな意味を持つものであった。即ち、1つのアミノ酸に対応する転移RNAが、複数存在する事を証明したのである（1965、tRNA isotypeの存在）。これは、遺伝子発現が、このレベルでも調節され得る事を世界で最初に示したものであった。第二の大きなお仕事は、数年後の、真核生物におけるメッセンジャーRNAの

5'末端にキャップ構造が存在することの発見である。

これも歴史に残る大発見であり、その構造の機能や意味について、その後、多くの研究が各国で為されることになる。

三浦さんは、その後も、特にRNAについて広く深く研究され、われわれを指導して下さったのみならず、亦多くの優れた後継者をも育てられた。すぐに想い浮ぶ名前でも、渡辺公綱さん、古市泰宏さん、下遠野邦忠さんなど、既に一家を為しておられる方も多い。

三浦さんは、お会いすると常に、「やあ」と手を挙げ、微笑を絶やさないう方であった。それでいて、学問的には厳しく、評価も方法論迄遡って為されるのが常であった。従って学者の間でも評判は高く、分子生物学会の会長も務められ、学士院賞などにも輝いておられた。

学会へ行っても、もうあの暖かい笑顔を見る事は出来ないと思うと、“同期の櫻”の関係にある筆者は、胸が痛む思いである。

しかし、三浦さんの学問の精神は後継者、否、全てのこの分野の人々に受け継がれ、発展し続けるであろう。若い科学者達が、近年、日本の学問を襲っている不条理な試練に負ける事なく、これを達成し、日本の科学に栄光を齎らす事を祈って筆を擱く。

---

## 三浦謹一郎先生のご逝去を悔やんで

筑波大学 生命科学動物資源センター

西村 暹

三浦謹一郎先生が昨年9月21日に急逝された。7月に新潟で開かれた日本RNA学会にもお元気で出席、発言されたと伺っていたので愕然としました。謹んでお悔やみ申し上げます。

三浦先生は1931年のお生まれ、丁度私より1ヶ月早いお生まれですが、東大理学部化学科では二年先輩でした。先生は二本鎖DNAの研究で著名なコロンビア大学のシャルガフ教授の下に留学され、東大では渡辺格先生に就かれて、当時から分子生物学、特にRNA研究を始められました。まさに分子生物学の黎明期から活躍を続けられた日本の分子生物学、特に蛋白質合成、RNA研究の権威であられました。

先生は名古屋大学理学部分子生物学研究施設、国立遺伝学研究所、東大工学部教授を歴任され、さらに1991年に東大を定年退官されたあとも、学習院大学、千葉工業大学で教鞭と研究を続けられ、お亡くなりになる前も東大柏キャンパスで客員として研究を続けられていました。正に生涯現役を貫かれました。この間、渡辺公綱先生、また古市泰宏先生、下遠野邦忠先生他、多数の日本の分子生物学をリードする研究者が先生の教室から排出しました。

三浦先生のごく初期の御研究で、著名なのはtRNAの構造と機能に関するものです。酵母未分画tRNAを放射性アミノ酸でチャージし、それをRNase T1で切断して、アミノ酸で標識された3'-末端断片を分別することにより、tRNAは一つのアミノ酸に対して複数分子種が存在することを明らかにされました。(Torao Ishida and Kin-ichiro Miura, J.Mol. Biol., 11,341-357, 1965)。酵母アラニンtRNAの全構造がちょうどR.W.Hollyらによって決定された時期の御研究で、まさに革新的な御仕事であります。

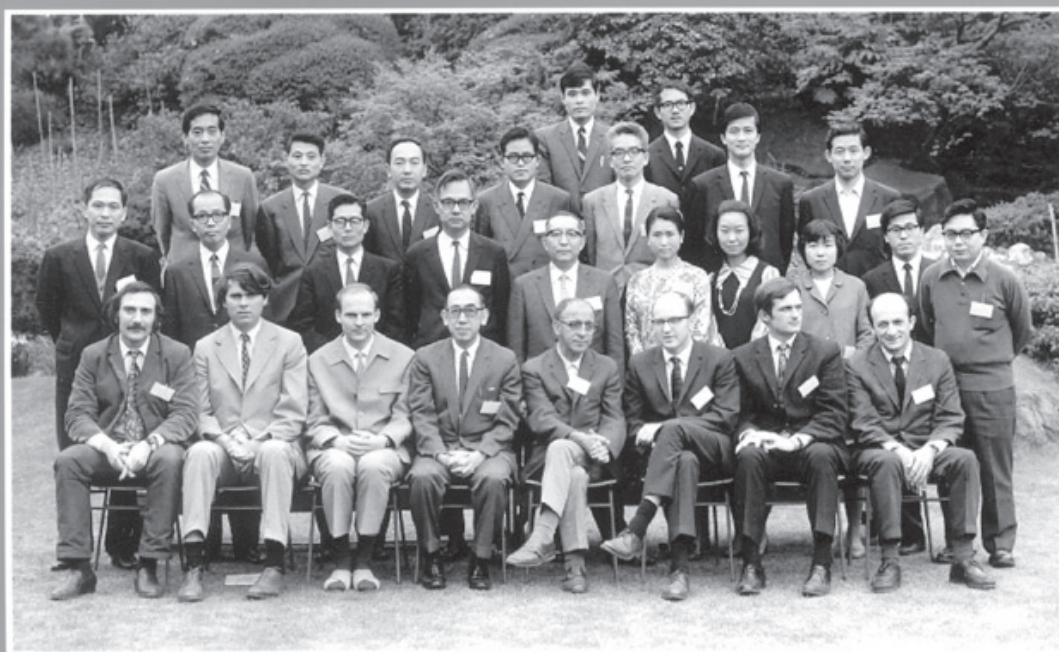
さらにもっとも三浦先生の名声を高めたのは1970年始めの御研究、古市先生とされた真核生物のメッセンジャーRNAのキャップ構造の発見であります。この御功績によって先生は1988年に、第78回日本学士院賞を受賞されました。ちょうど同じ年に私も日本学士院賞を受賞し、授賞式その他の行事を三浦先生と共にできたのはなつかしい思い出となってしまいました。なお、三浦先生は、日本RNA学会、日本蛋白工学会の設立にも尽力され、また日本分子生物学会の会長も務められ、関連学会の活動に貢献されました。

私が三浦先生を個人的にもっとも尊敬している点は、これまで述べたような御活躍の他に、先生の研究に対する卓越した評価であります。三浦先生は世間の流行に左右されることなく、よい研究を見抜く才能をお持ちでした。お会いするたびに三浦先生が「今はこういうアイデアでこんな研究をやっている。もうすぐ論文を書ける。」と静かな口調の中にも熱っぽく語っておられたのが思い出されます。御自分のアイデアを御本人と限られたスタッフで研究するスタンスであります。私事ではありますが、三浦先生は私が1960年代にオークリッチ国立研究所でおこなった大腸菌tRNAの限定分解によってtRNAのアミノ酸受容能とアミノ酸転移能が分離できるという研究を、他の人があまり注目しない時に高く注目しておられ、私の研究をプロモートしていただきました。

三浦先生のこれまでたどられた御研究の道は、きっと先生の御弟子、さらにその方々の御弟子さんによって受け継がれ、ますます注目をあびつつある日本の RNA 研究の発展を導くと確信しております。それをせめてもの慰めとして、三浦謹一郎先生のご冥福を祈ります。

(付録)

キャップ構造の発見に関して、今でも思い出されるのは、非公開の研究会で共同研究者の古市博士が細胞質多角体病ウイルスの転写系に S-アデノシルソチオニンを加えると、転写効率が 100 倍近く上昇することを発表された事である。この結果は私にとって驚きであり、ショックであった。ぜひ、自分もやって見たいという気持ちになったことを覚えている。おそらくその席にいた他の人達も同じ思いだっただろう。ただ、日本では他人の見つけた事には手を出さないという不文律があり（そのくせ外国でやられた研究はすぐまねをするが）、それゆえ日本では長い間キャップ構造の研究は三浦グループ以外はやらなかった。日本ではキャップの情報に外国にくらべ 1 年近くも早かったので、日本の核酸研究者がもっと関わっていればと今でも悔やまれる。



Tokyo 1970

1970 年に三浦義影先生の御尽力で学術振興会の後援の下、日米の RNA 研究の研究者が東京六本木の国際文化会館に集まった際の記念写真。最後列左から 3 番目が三浦謹一郎先生。前列中央が、三浦義影先生。当時の米国の若手研究者がほとんど今でも現役なのにくらべ、日本では大部分の方が現役を退いている中、三浦先生は最後まで現役研究者として活躍された。